

---

# 時空越えトーク・物語

B J

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時空越えトーク・物語

### 【Nコード】

N2854J

### 【作者名】

BJ

### 【あらすじ】

この小説はBJとこの『小説家になろう』に小説を投稿している作者様と二人で一話を綴って行くものです。

一話毎にBJと一緒に小説を書く人は変わります。

見て下さい。お願いします。

\*\*\*\*\*各作者様への……この小説への……お便りを下さい\*



愛実 ミ(前書き)

一話目は愛実 ミ様と綴って行く事になりました！

打ち合わせ無しのにいきなりの本番！！

見て下さいなあ

2階建ての家の居間には2階へ繋がっている登り降りする階段が見え、椅子が三つ、二つと一つが向かい合っている状態でその間にはガラスの机があった。

一つだけになっている椅子には人が一人座っていた。

BJ「皆さんはじめましてBJと申します。ここでは皆さんのお便りでゲストの方とお話をして行きたいと思っております。まだ、誰からもお便りはありませんが、フリートークをして行きたいと思っております。それでは！今日のゲスト！イフさんとピットくんです！」

2階へ繋がっている登り降りする階段から降りて来たのはピットだけだった。

それから椅子に腰掛けて隣の椅子にふと目をやる。

ピット「え？ ええ！ 椅子が二つって事は僕以外に誰か来るんですか？ 待合室には僕だけでしたけど……………」

イフ「私はここです。」

ピット「どわああっ！」

さっきまで誰もいなかった隣の椅子に急にイフが現れた。

そして、BJをみるなり向日葵みたいな笑顔を浮かべはにかんだ。

イフ「こんにちは、悪魔のイフです。よく影がうすいと言われま

す。ほら、あなたも自己紹介くらいしなさいよ。」

隣に座って固まるピットに指摘する。

ピット「あ、はっ、はい！ ぼ、僕は天馬の……じゃなくて、天使のピットです。天空界から、ええ〜きました。えとお、よく鳥に間違えられます。」

と、ピットのあたふたの自己紹介を終えて一息つく。  
それからB Jが苦笑いをして次の話題に移った。

B J「……はい、宜しくお願いします。まず始めに二人のプロフィールを出して貰うね？ 三河さ〜ん。プロフィール表持って来て下さい。あ、三河さんは私の助手みたいな者です。それと飲み物は何がいいですか？」

三河（白いドレスに身を纏って胸には白い布のバラが付けられている）が白い板に黒い文字で書かれたプロフィール表を持って来た。

三河「飲み物は何がいいですか？」

ピット「ぼ、僕はオレンジジュースをお願いします。」

イフ「私はコーヒーで。」

ピット「(コ、コーヒー………！？ 僕より小さそうなのに……  
僕って、子供………？ 涙)」

と、内心想っているピットであった。

三河が持って来たプロフィール表には……

名前：ピット



イフ「ピット君、落ち着いて〜(汗)」

ピットは俯いたまま。

ま、数秒後にはまたもとに戻るさ。

B「やっぱり世界観が違つと偉大さを感じますね〜。色々言いたい事はありますが……イフさんは本当に悪魔!? 何一つ悪魔感が出ていないんですけど! 嫌いなもの: 死……つて可笑しいんですけど!?! 好きなもの: 光……は色々ダメでしょ! 私が可笑しいの!?! 私が変なの!?! ねえ! 三河さん」

三河「私は個性だと思いますよ? 別にいいんじゃないでしょうか?」

三河がピットの前にはオレンジジュースを、イフの前にはコーヒ―をそれぞれ置きながら答えた。

B「それを言ったらこの小説終わってしまうんですけど!?! ねえ?!」

三河「私は……」

B「あなたじゃないですよ! あなたが何を言いたいのかわかるから!」

B「がガラス机をばんばん叩きながらツッコミ?をしている。

B「ナレーションさん! ちゃんとして下さい!」

チツ!うぜえなあ。

B「……ね、ねえ?! 小説として成り立たないですよね?」

愛実「ミ、それもたのしいんじゃないですか」

(飛び入り)

後ろのごみ箱からひょっこり顔がでた。

ピット「ごみ箱！？ いつのまに!？」

ここで愛実 シはスタッフ達に引きずりだされました

さて、本編に戻りましょう。

イフ「私は昔は悪魔じゃなかったんです。」

イフはちよつと悲しい目で話しはじめた。

BJ「ちよつ、待って！ それここで言う!？ 言っちゃっていいの!？ この小説そんな深い所までまさぐるの!？」

三河「BJ様、その前にツッコミを入れる所が……」

BJ「アンビリーバー」

三河「古いつ!! しかも意味わからないです!」

BJ「そろそろ時間がやって参りました。さっきの話は今度来た時まで取って置きましょう。まだ、全然話を聞いてないですがまたお呼びしたいと思いまして全ては聞きません。最後に何か聞きたい事とかありませんか？」

ピット「あなたの正体は？」

イフ「……しょ、正体……? BJさんの正体……? そんな事聞いていいの？」

ピット「いいんです。さあ答えて下さい。」

イフ「すみません。BJさん。」

BJ「……私の正体? ……私の……正……体……は………企業

秘密です　この小説の最後でお話しましょう。それで皆さんに楽しんで頂ける様に考えました……この小説に私の正体のヒントを入れます。話の中に入っているので読者様は考えながらこの小説を読んで下さいね　それでは、イフさんとピットくんでした！」

B「J・三河」「ありがとうございます……！」

ピット「皆様、今日はどうもありがとうございました！」

イフ「皆様、今日はどうもありがとうございました……。」

愛実「ミ「皆様、今日はどうもありがとうございました」。( )」

愛実 ミ(後書き)

三河「……B J様？ 一体どうするおつもりですか？」

B J「だって聞かれたんだもん。今じゃなくても答えなきゃ」

三河「……はあ……ばれたらB J様は帰らないと行けないんですよ？ もうここには居られないんです」

B J「わかってます……」

事前に次、一緒に書いてくれる人が誰かをお教え致しますのでお便り等を下さい。

会話が弾みません。

この小説へのお便りでも構いません。

では、ナレーションの中囀でした。



ヒーハー！

お前気持ち悪いな……

なっ！うゝ、うるさい！仕方ないじゃないか！

それでもちゃんと書くのが一流じゃないのか？

うう……

( . . . ; )

コイツの代わりに読者に言います。

面倒臭いでしょうがあらすじを見て下さい。

コイツの分も宜しくお願いします。

m ( — ) m

汐嵐（前書き）

今回は汐嵐様とやらせて頂きました！

（＾o＾）／

感想・評価等を下さい。

≡（　　）≡

## 汐嵐

2階建ての家の居間には2階へ繋がっている登り降りする階段が見え、椅子が四つあり、三つと一つが向かい合っている状態で間にはガラスの机があった。

一つだけになっている椅子には人が一人座っていた。

B J「皆さん。お久しぶりですB Jと申します。ここでは皆さんのお便りでゲストの方と会話して行きたいと思っております。それでは！今日のゲスト！京佑さんと優治さんと光騎くんです！」

階段から………三人が降りて来た。

京佑「君って何だよ君って。俺らそういう年じゃなくね？」

優治「つか何でいんだよお前が！おい園堂！」

光騎「え、何気に俺キーマンだから。この物語の」

と言いつつ席にちゃっかり座る。

B J「今日は宜しくお願いします。さて、まず始めに………光騎くんの言う通り光騎くんはこの話のキーマンのポジションですよ？」

くんが嫌ならちゃんにしますか？ 京佑ちゃん」

京佑「ちゃんは嫌だ。ちゃんは。つか光騎がキーマンなんて知ってるよそんくらい？ なぁー、俺ら同士だもんな。焼き肉協定結ぶから、なぁー？」

光騎「どうだ入れてほしいか優治にB J。つか何だよこのノリは」

優治「いや別に良いけど……」

京佑「うわー優治君良いのー？　じゃあ出てけ」

優治「どわっ！」

ばたん。

優治「京佑エエ！　てめ、開けるオオオ！」

京佑「じゃあ土下座。そこで小一時間ほどな」

光騎「ガッツだガッツ」

優治「すげエ他人事だなオイ！　ちよ…… B J助けるオオ！」

光騎「ダメだよオ他人に頼っちゃ立派な子にならないから」

優治「お母さんかお前はッ！」

光騎「とりあえず優治は土下座な」

B J「じゃあプロフィール表を見ますね？　三河さん。京佑と光

騎くんのプロフィール持って来て下さ〜い」

三河（サラリーマンの服装）が白い板に黒い文字で書かれたプロフィール表を持って来た。

三河「はい。お二人は飲み物何がいいですか？」

優治「おiiiiii！　俺はスルーかアアア！」

京佑「あ、俺はコーヒ〜くれる？　砂糖2、3個持ってきて」

光騎「俺はブラックで良いや〜」

京佑「おーい優治イ、2週間パシリ券くれるなら入れてやっても良いぞ〜」

優治「ふっざけんなオイ！」

光騎「ガッツだよー優治君。ここでこのチャンス逃しちゃうとねー、一生土下座することになるからア」

優治「喜んで差し上げたいと思いますッ！」

京佑「よし、入れるか」

優治「何なんだよこのドS……いや、鬼畜か」

プロフィール表。

名前：皆同 京佑。

年齢：26歳。

性別：男。

趣味：ゲーム。

好きなもの：本編には出てきてないけど辛いものとかお酒とか。  
嫌いなもの：本編には出てきてないけど何気に苦いものが苦手。

名前：園堂 光騎。

年齢：25歳。

性別：男。

趣味：爆弾作り。

好きなもの：金目のもの全般。特にアクセサリー系。  
嫌いなもの：焼き肉。てかそれで焼き肉協定を結んで良いのか？

名前：梓沢 優治。

年齢：26歳。

性別：男。

趣味：普通に音楽鑑賞？

好きなもの：苦いもの。

嫌いなもの：マフィアとか？ 正義感強いから

BJ「はい。わかりました。質問ですけど、光騎くんはマフィア

のドルドという一味なんですよね？ 大丈夫なんですか？ 隣にマフィア嫌いがいますけど………ま、いつか！………よくないよ！」

三河「この世界ではマフィアがそこら辺歩いてても可笑しくないのでからね。だから警察の優治さんも捕まえないんです。郷に入<sup>い</sup>つては郷に従えということわざが存在するのもそついう理由です」

三河が京佑の前にはコーヒーを光騎の前にはブラックコーヒーを優治には角砂糖を三つそれぞれ置きながら答える。

B J「そうなの？ 私知らなかったよ………この世界安全なの！？ 私の世界なのにびつくりだわ！」

三河「はい。この世界のマフィアの方々は皆さんフレンドリーですから」

B J「それ恐つ！！」

京佑「大丈夫だよー別に本当に嫌いだったら来ねえわけだし？ ま、敵味方だから嫌いなわけで、こう言う逮捕とか関係ねえところでは仲良しこよしが作者の思惑だからさア」

光騎「そうそう、緊張感がない爆発を仕掛けられるほどお茶目だから俺達。願わくばあれだよ、出してあげようか幹部の皆さん？ 本編では出てきてないけど、舞台裏ですーみたいなネタバレだけでもいいから」

優治「色々危ない橋を渡るなお前ら！！ おま、俺はあいつらが幹部なんて知んねーんだぞ？！ 今出てきたらネタバレどころか設定と今後に関わるだろうがアアア！」

京佑「良いよもう、声優のくちやべりトーク的なあれで。舞台裏なんだからなんでもありです的な」

光騎「てかお前の発言自体がもうわかってますって言ってるようなもんだろつが。危ない橋を渡ろうとするな、お前はあれか、そんなにも俺にパシリ券を献上したいか」

優治「自分でまいた種人のせいにするのやめてくれる？！」

B J「いやあ、かなり盛り上がった所で、じゃあ出しましょうか？」

スタッフ「イエーイー！ ヒューヒュー」

B J「スタッフもノリノリですよ。このままの勢いで登場して貰いましょう！ 幹部さんと達です！」

三河「いやいや駄目ですよ！ 登場したら駄目です！ スタッフもノリノリじゃないですから！ 皆さん、恐いぐらい真顔ですから！ ピクリとも笑ってないです！！」

光騎「だからア、マフィアつつつても今から出てくんのは、色っぽい姉ちゃんとかDSのガキとか……」

京佑「あ、さらつとネタバレした」

優治「止めてくれ！ あいつを出すのは止めてくれ！ 俺の命に関わる！」 B J「もうバラしたんだしこれで終了ですね。登場はまた今度という事でトークは三人しか出せない決まりですのでまた誘っていいですか？ また来てくれるかな？ (タモリ風)」

光騎・京佑「いいともー」

優治「もう、誰が来るかこんな場所ッ！」

B J「まだ終わってませんよ」

三河「まだ少し時間があるので駄弁りましょう」

京佑「良いよもー。いいともつつつたんだからシメで良いじゃん」

優治「確かに駄弁るつつつてもネタがねエな」

光騎「てか三河さん、コーヒーおかわり」

B J「じゃあ死にさらせえ！！！」

三河「というのは冗談です」

B J・三河「ありが……」

ありがとうございます！

B J・三河「ちよつ、被ってる！ 聞こえないじゃん！ あなた言わなくていいですから！ ナレーションしていたらいいんですよ

「………それでは！  
京佑、優治くん、光騎くん。ありがとう  
ございました！」

汐嵐（後書き）

三河「……どこに行くんですか？」

ピシャーン！ と雷が落ちた様な音が聞こえBJはゆっくりと背後を見る。

BJ「……三河さん？ ……どこに……その、焼き…肉協…定を結びに……」

三河「……」

無言の恐怖を受けたBJだった……

ナレーションの中岡だよ

BJ「うわっ、35のオッサンがなんか使ってる……」

……見たの？

三河「バツチリ」

……また宜しくな！

二人から無言の恐怖を受けたナレーションの中岡だった……



## ひざのつらはやあ (前書き)

今回はひざのつらはやあ様と書くことになりました。

ではごいね。

感想・評価・お便り等をよろしくお願いします。

☞ ( — — ) ☞

この脚本の読み方

(ト書き、もしくはひざのつらの補足)

役柄名(演じているキャラ)：台詞(ト書き)

今回はひざのつらはやあ様が演劇を書いて私はひざのつらはやあ様にツッコミを入れるという感じになっています。

## ひびきのつらばやお

B J「……え？ 演劇……ですか？」

三河「はい。気分転換に演劇を見るのはどうかと思ひまして」

B J「嬉しいですけど……なんで気分転換に演劇？」

三河「じゃあよろしくお願ひします」

B J「ええ！？ 無視！？」

三河はスキップを踏んで鼻歌を歌いながら……消えた。

B J「なんで!?!」

答えは演劇を見るとわかる。

B J「わかりました……行ってきます」

「無題（文字がかすれて読めない）」

原作 ……ドワ……ド・エ………ク（所々文字がかすれて読めない）

改作 ルミテス・リゲル

### キャスト

アアア王子：リータ・トラジスタ

クスエニール姫：クロノ・ベギラマ

アクエウス王：ルード・トラジスタ

従者アイウエ：シャルル・アルデバラ

盗賊A：ミーシャ・ベテルギウス  
盗賊B：キーファ・プロキオン

魔王ナムーコ：??? (出ない)

スペシャルサンクス：その他の生徒会の皆さん

B J「名前にやる気が見られない！ 魔王ナムーコで、絶対ナムコから作つたろ！ アクエウス王もアクエリアスから作つたろ！あと、スペシャルサンクスって何だよ！ 特別なありがとうございます。意味わからんわ！ これ絶対エキストラだろ！ 気分転換どころかストレスが溜まりそうなんだが！ それでも入る私だけけどね  
！！」

……  
(場、アクエウス王国の城内)

(幕上がると、アクエウス王、下手の方の王座で眠っている)

B J「なんで王座で眠ってんの！？ 寝室ないの！？ 王様なのに寝室ないって……王座買っ金あるならまず寝室買ってあげてよ！」

(兵士、上手から入場。急ぎ足)

兵士：大変です！ 王様！ 大変です！

アクエウス王<sup>ルド</sup>：何だ、騒々しい！ 余は昼寝しておつたのだ！  
いや……もう夕方だから夕寝か。

B J「どうでもいい！ 上手くもないし！」

兵士：大変です王様！ クスエニール姫が！ 魔王ナムーコにさ

られました！

王：なん……………だと……………。

兵士：早急にご命令をば！

B J「ば！？ あ、言い間違いか」

王：しかし……………お前が行ってもなあ……………。

B J「王様、娘がさらわれたのに結構冷静だな！」

兵士：ご命令をば！

B J「言い間違いじゃなかった！！」

王……………。

兵士：（助けに行きたそうに）ご命令をば！

王：うるさいな。そんなに死にたきや行けば……………

兵士：（心底嬉しそうに。王が言い終わらない内に）ありが……………

アイウエ（シャルル）：（声のみ。兵士の言葉を遮る）待てーい！

（上手から従者アイウエと、アアア王子が登場。

従者がやたら張り切っている）

アイウエ：兵士殿、魔王ナムーコの城までは危険です！ 魔王討

伐はこの王子アアアに……………

アアア王子<sup>リータ</sup>：ああっちょっごめんなさい！ こら！ アイウエ

！ 王様の御前だぞ！ 頭が高い！

（そういうアアア王子も頭が高いが王は気付かない）

王：そなたは！ とても剣が強いと評判のアアア王子ではなからうか！

B J「あれ？ 王子なのに王様の息子とかじゃないの？」

アアア：その通りでございます。先ほどは従者が失礼なことをして申し訳ありませんでした。

王：いや、よい。そうじゃ、そなたが姫を救ってくださらない

か？

兵士：えええええ！？ 王様、いくらなんでもそれは……

王：うるさいお前は黙ってるこの一兵卒風情が！ 勇者を気取るな！

兵士：……。 (不満そうに黙る)

アアアア：それは、大変栄誉あることですが、しかし……僕に魔王が倒せるでしょうか？

王：貴殿はドラクエ王国最強の剣士との呼び声が高い。ほかに誰がおるか？

兵士：ご命令をば！

王：お前じゃない！ でしゃばるな！

兵士：はっ……。

王：よし、もしわが娘を助けだしてくれたら、そなたに娘をやるう！ それでよいだろう？

アアアア：えっ、あの世界三大美姫のクスエニール姫をですか？

(間) 本当にいいんですか？

王：うむ、そなたのような王子のもとに嫁ぐのであればあやつも喜ぶだろう！

アアアア：うーん、そうかなあ……。僕、小さいときに魔物に襲われて片目なんですよ？ ほら。

(アアアア、前髪を上げ聖眼を見せる。従者、兵士ともにぎよつとするも、王はそれをまじまじと見る)

王：いや、それほど気にすることはないだろう。今はまだ戦乱の世だ、その方が強く見えるぞ。

アアアア：ほ、本当ですか！

(アアアア、素で喜ぶ)

王：余がそなたに嘘を申すはずなからう！

(アアアア、明らかにテンションが上がる)

アアアア：そうですか！ では……その僕が姫を助けに行ってもいいでしょうか？

王：もちろんじゃ！ （うなだれる兵士を見て）……この兵士もつかわそう！

（直後、兵士の顔が輝く）

兵士&アアアア：（同時に）ありがとうございますー！！

王：あ、いややっぱやめた。

兵士：えー！？ 何故です？

王：なんか、お前の喜ぶ顔見たくない。

兵士：そんな！

B J「兵士最後まで報われねえ！ ……兵士……同情するよ」

（兵士、あからさまにOTLの恰好。アアアアとアイウエ、ひたすら兵士を無視）

B J「うん。ここは私もスルーで」

アイウエ：よかったですね王子。これで美人のお姫様と結婚できますね！

アアアア：いや、別に僕はそれを狙ったわけじゃないのだけれど

……

王：自慢ではないが、わが娘は大陸一の美姫といわれておる！

アアアア、だからぜひお前に助けてほしいのじゃ！ 頼んだぞ！

アアアア：は、はい！

（アアアア、アイウエ、兵士、上手より退場）

（暗転）

（効果音：ドラクエの宿屋のBGM）

(明転)

(場、森へ変わる)

(アアアアとアイウエ、上手からゆつくりと歩いて登場。アアアアは剣を、アイウエは銃を構えて臨戦態勢)

アアアア：いかにも、何か出てきそうな森だね……。

アイウエ：実際何かが出てきてもおかしくないですね！ まあ、大丈夫ですよ！

アアアア：ねえ……なんで、君ってそんなに楽道家なの？

アイウエ：ええ、まあ、気質ですから！

アアアア：……。

(ほとんど素の会話と変わらない台本)

(間のあと、草葉が揺れる効果音)

B J「ガサガサ」

アアアア：な、なんだ！

(BGM：ロケット団のテーマ)

B J「ミ、これは……！」

盗賊A：(声のみ) な、なな、なんだかんだときかかれたら！ (明らかに緊張して)

B J「なんかわからないけどファイター！」

盗賊B：(声のみ) 答えてあげるが世の情け！ (割と落ち着いた)  
ている)

B J「ここまで真似ると何も言えねえ！」

(その台詞の直後、盗賊A、B続けて下手から登場。銃を構えて、アアアアとアイウエに突き付けている)

盗賊A：この森の平和をみやもるため！ (噛む)

B J「今噛んだよな!? ああ、観客から声援が……。観客を手玉に取るとはおぬしやりおるのお」

盗賊B：この森の秩序をただすため!

盗賊A：愛とまこ、誠の悪をつらんく！ (同前)

B J「ここまで来ると逆にこのまま噛んでいてほしい!」

盗賊B：らぶりーちゃーみーなかたたたき! ……あっ! (噛んだわけではなく言い間違い)

B J「わざわざ補正までつけてくれた!」

盗賊A：盗賊A!

盗賊B：盗賊B!

盗賊A：銀河を舞う……なんだっけ? (盗賊Bに小声で忘れた台詞を問う)

盗賊B：(小声だけど劇場に響いている) もう……流星団だよ……。

B J「うん。観客に聞こえてるけど私達皆スルーだね」

盗賊A：あ、ありがと! ……りゅ、流星団の二人には!

盗賊B：ブラックホール! 何でもかんでも吸い込むよ! (言い間違い)

B J「何を間違えたのかわからないですよ……誰か教えて!」

(アアアアとアイウエ、台詞が終わると何事もなかったかのように盗賊に武器を向ける)

アアアア：出たな流星団!

アイウエ：今度という今度は逃がさないです!

(ちなみに流星団は初出単語)

盗賊A：いや、今日という今日はおんたの剣を奪ってやるんだから！

盗賊B：行くぞ！ A！

(盗賊A、Bともに、銃を構えたままアアアに襲いかかる)

(アイウエ、即座に両腕を動かして正確にA、Bを狙い撃ちするも、外す)

(盗賊A、Bは森の大道具の木立のなかに隠れながらアイウエとアアアを狙い撃つ)

(銃撃戦、開始！)

(アアアアが盗賊Aを、アイウエが盗賊Bをとらえる)

B「一瞬で捕まった！ 銃撃戦終わるの早っ！」

アアア：よし、捕まえた！

アイウエ：こちらもです！

盗賊A：た、たすけてー！ (角度的にスカートからパンツが丸見えだが気づかない)

B「え、これサービス？ サービス精神溢れる方ですね」

盗賊B：(相方の痴態に気付く) ちよ、ミー…… (言いかけてやめる) なんでもするから許して！

(舞台、いったん暗転)

(明転すると、盗賊は縛られている)

アアアア：ねえ、謝ってるんだから許してあげようよ……。

アイウエ：いや、こいつらが魔砲を使ったのが気になるんです！

B J「魔砲が何なのかは元ネタを見てね」

アアアア：そんなこと言ったって、魔砲なんて訓練すればだれでもできるし、それより僕ら急がないと！

アイウエ：あ、そうでした！ 私たちには魔王ナムーコを倒す仕事があるんです！

盗賊 A：え、ナムーコ？ それあたしの友達だけど？

B J「魔王まさかの盗賊と仲良し……！！！」

盗賊 B：ちよっ、A！ (咎めるがもうすでに遅い)

アアアア：友達？

盗賊 A：うん、そうだよ！ だってナムーコがこの森に潜めばいるんな人からお金がもらえるって聞いたから！

アイウエ：ねえ、ナムーコの弱点知らない？

盗賊 A：何だろう？ ピーマンとかかな？

B J「子供かつ！ 魔王子供かつ！」

盗賊 B：ああ、確かに、ピーマンは嫌いだって言ってた！

アアアア：じゃあ剣にピーマンを突き刺して……いけるかああい

！！ (台本通りに突っ込む)

B J「私の代わりに……？ ありがとう！」

アイウエ：でも、魔王というくらいですから、ピーマンくらいじゃないでしょう？ (台本からはずれて突っ込み無視)

アアアア：(恥ずかしさに顔が真っ赤になる) うん、まあ、そうか……じゃあ行こう。

B J「なんでかわからないけど可愛いつ！」

アイウエ：途中でピーマン買って魔王の城ですね！

アアアア：ああ、そうだ。

(アアアアとアイウエ、そういつて下手から退場)

(盗賊にはなにも触れられないまま暗転)

B J「盗賊解放させてあげて！ 私の好きな放置プレイかつ！

……冗談だから本気にしないでよねっ！！」

(場、魔王の城へと向かう吊り橋)

(舞台ほぼ真ん中に、杖をついて黒いロープを被った魔術師が吊り橋の入り口を通せんぼしている。上手側に、アアアアとアイウエ、ボロボロの服装で無様に跪いている。アアアアの剣にはピーマンらしき緑色の物体が刺さっている)

B J「一体今までに何があつたんだ！ しかも本当に刺してるし

！」

シルフ

魔術師：この先は通さん！ ナムーコ様の命により、ここを通すものは始末してよいとのことだ。

B J「 ”通す” じゃなくて ”通る” だよな」

魔術師：残念ながら、クスエニール姫をめぐる貴様らの旅は、ここで終わりだ！ くらえ！ 『エターナルフォースブリザード』！！！！

(魔術師がそう唱えた瞬間、周囲から白いガスが噴き出る)

(寒そうに震えるアアアアとアイウエ)

アアアア：くそっ……ここまでか……。

アイウエ：王子、こうなったら奥の手を使います！

アアアア：どうするんだ？ まさか……。

アイウエ：まあ、黙ってみててください！

(アイウエ、魔術師に近寄る)

(魔術師、少し驚くも、動かず)

魔術師：どうした、死にに来たのか？

アイウエ：(下手の方を指さし) あ、UFOだ！

B J「まさかの古典技——！」

魔術師：え、どこどこ？(後ろを向いてきよるきよるする)

B J「しかも……ツッコミ入れないからなっ！」

アイウエ：えいやあーっ！(魔術師を押し)

魔術師：しまった！ あーれ————！(吊り橋から落ちる)

B J「従者血も涙もねえ！ 躊躇一切ねえ！ しかも魔術師が落ちる時、魔術師は古典的な反応だし！」

(アアアア、思わずぼおつとする)

アアアア……意外と間抜けな奴だったな。

アイウエ：ああいう魔術の勉強ばっかしてる奴なんて、あんなもんですよ。

アアアア：お前、結構ひどいこと言うな……。

アイウエ：いやあ、それほどでも。

(ふたり、吊り橋を渡る。暗転)

(場、魔王城の城門。効果音：カラスの鳴き声)

(上手よりアアアア、アイウエ登場)

アアアア：ついに、ここまで来たか……。  
アイウエ：ようやく、って感じですね。

(間)

クスエニール(クロノ)：(声のみ)魔王、覚悟!! 創作魔法  
剣・「肉詰<sup>ニクツメ</sup>」!!!

B J「ピーマンの肉詰か!?!」

(効果音：ガシャーン)

(直後に断末魔)

アアアア：い、今の声は……。  
アイウエ：何があったんでしょう?

(下手よりクスエニール登場。アアアアを見つけ、驚く)

(クスエニール登場時に学院のクロノファンの女の子たちからの黄色い歓声が響くが、場はそのまま進行)

B J「え、何この声?」

クスエニール：貴方は……アアア王子!

アアアア：クスエニール姫! 無事だったか!

クスエニール：ええ、魔王ナムーコがあまりにもピーマンを嫌うので、無理やり食べさせようとしたら、倒してしまいました。

B J「魔王……!!!」

アアアア：え、あれで魔王死んじゃったの!?

クスエニール：ええ。魔法剣まで使ってしまったから、完全

にこと切れてますよ？

アアアア：なん……だと……。

アイウエ：私たちは……一体……。

(うなだれるアアアアとアイウエ)

(きよとんとするクスエニール)

クスエニール：まあ、でも、どうせ私の父上のことですから、ここから私を救い出した者には、私は…… (クスエニール、若干赤面) キスをしなければならぬのですね。

アアアア：いや、それよりもっとすごいこと…… (言葉を言い終わらないうちにクスエニール、アアアアに抱きつく) うわっちよっ！ どうしたんですかいきなり！ (素で驚くアアアアというかりータ)

クスエニール：アアア様、とっとと済ませときましよう。

アアアア：いや、それおかしいって！ (以下小声) というかこれ台本にないぞクロノ！

クスエニール：おかしくはありませんわ。私はあなたをお慕いしているのですもの。(以下小声) 知るかルミテスからもらった私の台本にはこう書いてあったしあいつもそれでいいって言ったんだ今さら変えられるか！

アアアア：え、ええええ…… (以下小声) じゃあ抱擁だけで済ませるぞ。僕の心の準備が足りない！

クスエニール：さあ、早く！ (以下小声) ふざけるな！ お前、私がシルフでどれだけ練習させられたと思ってるんだ！ このシーンでキスがなかったら私はここ数日ひたすらシルフとした努力は…… お前男同士のキスがどれだけ気色悪いか知らないだろう？

アアアア：(小声) ああわかったわかった！ わかったけど！ 僕なんかでいいのか？ 君、どうせ女の子とキスしたことなんてな

いだろ？

クスエニール：（小声）余計なお世話だ。シルフよりはるかにマシに決まってるだろ！ いいから私の努力を水の泡にしないでくれ……袖にしたら数週間は立ち直れん……。

アアアア：（小声）だあーっもう！ えい、ままよ！

（ということ、アアアとクスエニール、結構ディーブなキス。そのまま暗転）

B J「うわーっ！ 寸止めだとはわかってるけどなんか恥ずかしい！ 変な所上手いし！」

ナレーター（サラ）：こうして、アクエウス王国に平和が訪れることになったのだ。めでたし、めでたし！

（パチパチパチパチ……）

私達の方、つまり観客席から盛大な拍手が流れた。

B J「なんであそこに行かせたんですか！」

三河「お、落ち着いてください」

B J「……説明してくれますよねえ？」

B Jは近くにあつた机を二回叩く。

三河は肩を落として頭に手を乗せてなんと答えるかを考えているかのように見えた。

三河「……遊びです」

「B」.....

この後、何が起きたかは皆さんにお任せします。

（ ）

ひびきのつらはやお（後書き）

B J「そういえば。最初三河さん消えましたよね？ あれの答え  
わからなかったんですが……」

三河「……………」

三河は右斜め下を見て顔を伏せる。  
段差に気付かずに落ちてしまったことを言えない三河だった。

三河「ナレーションさん！」

おっとつい声が

三河「わざとですよね！ …… B J様？ ニヤつかないでくれま  
すか？ キモいのですので」

B J「ひでエ！ でも三河さん。なんて古典的なんだ！」

では、これでさようなら〜

B J・三河「ありがとうございました！」

以上。ナレーションの中囀でした。

## 獅施額羅

2階建ての家の居間には2階へ繋がっている登り降りする階段が見え、椅子が四つ、三つと一つが向かい合っている状態で、その間にはガラスの机があった。

一つだけになっている椅子には人が一人座っていた。

B J「皆さんはじめましてB Jと申します。ここでは皆さんのお便りでゲストの方とお話をして行きたいと思っております。フリートークをして行きたいと思っております。それでは！今日のゲストに登場してもらいましょう！」 柳海さん！ 安颯太さん！  
葉倉慧さんの三名様です！」

2階へ繋がっている登り降りする螺旋階段から降りて来たのは柳、安、葉倉達。

柳「よっしゃあああ！ テンション上がってきたあー！ 俺ちょっとその辺を全力疾走してくるわ」

襟よりも少し長い黒髪を揺らし、満面の笑みで叫ぶカイ。

安「落ち着け、カイ。熱い状態でさらに汗をかいてどつする。こつという時は……服を脱いで体を冷やすんだ！」

バツと上着を脱ぎだす赤茶髪の颯太。

葉倉「ソータ……バカ枠に加えて変態枠にもカテゴライズするけどいいかな？」

呆れたような顔の、ボサボサ頭の慧。

三人が並ぶと慧が一人小柄なため、凹の字のように身長差が表れる。

人前だというのに彼らはいつも通り駄弁りながら、それぞれ椅子を引いて座った。真ん中に慧、その右側に颯太、そして左にカイという配置だ。カイと颯太がケンカを始めないよう、慧は無意識的にその位置を選んだのだろう。

B J「はい。いきなり個性的でよろしいですね。ただ、服は脱がない様にお願いますね？……警察さんに捕まりますから」

B Jは歩いて近づいてくる三河（警官の服を着て、両手を手錠で縛っている）を軽蔑の眼差しで見ながら呟いた。

三河「お、お飲み、ものは何に、しますか？ あ、暑いのでしたら、クーラーの、温度、上げま、しょうか？」

三河は鼻息を荒くしながら柳・安・葉倉の三人に尋ねた。

B J「上げてどうするんですか？ あと、何興奮してるんですか？

この……変態枠にカテゴライズした奴めっ！」

安「の、飲み物だとオツ！？ ……いや、叫んだことに特に意味はない」

葉倉「ソータうるさい」

不意に風切り音が鳴り、直後、鈍い音と共に安が机に突っ伏した。

柳「バカめ。あ、俺は飲み物持って来てるから……。それと室温はこのままでいいぞ」

葉倉「おしるこ。あつついやツね」

二人は手を挙げて、それぞれ注文を口にす。

安「俺は……カレーだ！」

机を叩いて立ち上がり、大声で言った。

三河「……どうぞ。石焼おしるこです」

注文を聞いた三河は、BJ達から見えない所にある台所に向かった。少して、三河が戻って来て、皿に乗せたお椀型の石を葉倉の前に置いた。

熱々に熱した石の中にはおしるこがぶくぶくとマグマの様に沸騰している。

BJ「……」

三河「……颯太さんはこちらでしたよね？」

三河が何かにニヤつきながら、安の前に……。なんとという事でしょう。三河が安の前に置いたのはカレー……。ではなく、なんて古典的なボケ……。カレイを置いた。

BJ「……さて！ それではプロフィールに参りましょう！」

・柳海 やなぎ かい

所属：私立破天高校一年四組

部活：書道部

身長：百七十三センチメートル

趣味：書道 料理

特徴：「炸裂のバカ」の通り名を持つ、学年トップレベルのバカ。  
書道の腕はかなりのもの。

・安颯太 やす そうた

所属：私立破天高校一年四組

部活：弓道部

身長：百七十三センチメートル

趣味：騒ぐこと

特徴：通り名こそないが、カイトに次ぐ生粋のバカ。  
弓道は初心者。

・葉倉慧 はくら けい

所属：私立破天高校一年四組

部活：剣道部

身長：百五十二センチメートル

趣味：なし

天才型。  
特徴：剣道の腕は全国レベルで、特に努力せずとも勉強ができる

「ダーク慧」と呼ばれる状態に陥ると狂暴化する。

葉倉「うん、やっぱり熱いおしるこは美味しいよね」

煮えたぎるおしるこをものともせず、葉倉はそれを口に運んでいる。

安「あ？ 何だコレ、ヒラメ……？ まあいい、出されたものを残すようじゃ、漢じゃねえよな。飲んでやるぜえ！」

安はカレイを掴むと、豪快に口に放り込んだ。

安「うおおおおおおお！ 骨があああああああ！」

そして喉を押さえて地面にのたうち回った。

柳「バカが、無茶しやがって……」

安「テメエ、誰がバカだコラア！ テメエの方がバカだろうが！」

柳「バカっていう方がバカなんだよ、バーカ」

柳は懐から魔法瓶を取り出し、ゴクゴクと飲み物を飲み始めた。持ち上げられたその底を、安が更に上げる。

柳「ゴフツ……！ バカソータ…… テメエ！」

安「ざまあみやがれ！」

二人の間に火花が散る。二人は拳を固く握っており、今にも戦いが始まりそうな雰囲気だ。

葉倉「二人とも、はい着席」

慣れたように二人を力づくで座らせ、何事もなかったかのように振る舞う葉倉。

葉倉「それじゃ、どうぞ続けて下さい」

B J「こうして見てますと、葉倉さんが頭みたいですね」

三河「出された物は全て食べる。颯太さんこそ、漢を名乗るに相応しい方です！……という事で、颯太さん。これをググツと一気にお願いします！」

安の前に置かれたのは一升瓶のビール。

(俺、ナレーション中岡は見ってしまった。三河がビールの中に市販されているわさびのチューブを五本程入れていた所を……)

B J「三河さん。未成年にお酒を飲ませないでください」

三河「一気に！ 一気に！ 一気に！ 一気に！」

B J「あの……三河さん？」

三河「飲んでエ！ 飲んでエ！ 飲み干して！ ハイ！」

柳はそっと立ち上がり、ふらふらと退室した。

安「H A H A H A、よしてくれよ。漢たるもの、ルールは守るべきだと思わないかい？」

葉倉「うん、よかったよ、この手を鮮血に染めないで済んで。飲んで

でいたら殴らなくちゃいけないところだった」

柳「じゃ、これ一気で」

戻ってきた柳は、机の上にドン、とコーラのペットボトルを置いた。

安「あん？ 炭酸だと？ 楽勝だぜ！」

安はキャップを捻り、一気に口に流し込んだ。すんなりと捻られるキャップには違和感を抱かなかつたのだろうか。

安「辛えええええ！ ちょっ……ええっ！？ 何だコレ！」

柳「タバスコがたっぷり入ったコーラだ。辛いのが飲みたいだろうと思って……」

安「ふざけんなコーラ！」

柳「さーで。バカは放置して、話を先に進めようぜ」

三河「……やられました。完敗です。私は……海さんに……海さんに負けました！」

泣き崩れる三河を無視したB Jは、先に進む事にした。

B J「はいはい。それでは……ここで新コーナー！ 『宣伝夜呂死久！』」ここでは何でもいいですので、宣伝をしていただきたいと思えます！ ただし！ 100文字でお願いします！ 100文字になりましたら強制終了ですので、悪しからず。では、お願いします……！」

柳「それじゃ、俺から。素敵な人生は素敵な一日の積み重ね。素敵な一日は素敵な朝から。素敵な朝は……一杯の紅茶から！ みんなも紅茶で素晴らしい人生を歩もう！ 以上！」

三河「……………という事で皆さん。紅茶です。どうぞ」

にこやかに微笑む三河が全員分の紅茶を出した。

BJ「どうも……………あっ！……………っ！……………熱いわ！！でも飲む私です」

紅茶を少しずつ口に運ぶBJ……………と、ここで俺も一杯。ずずず……………うん、甘いな。でも美味しい。

柳「ん？ だから飲み物あるってば」

葉倉「おしるこ残ってるし」

二人は容赦なく拒絶の色を示す。

安「お前ら……………！ 正直俺もこの短い間隔で再び飲み物を出されるとは思わなかったが……………。人の好意を無下にするなよ！ 俺は飲むぜ、お前らの分まで！……………この、タバスコーラの後でな！」

なんとも誇らしそうな表情で紅茶三杯を引きよせた後、ペットボトルを掴み、喉を鳴らして中身を飲みだした。

安「カーーツ！ 効くぜえ！ 慣れればこの辛さも悪くないな」

BJ「おもてなし精神がある三河さんですから許してあげて下さい」

三河の代わりにB Jが頭を下げ謝る。

三河「……あれ？　なんか私嫌な人みたい立場になってませんか！？　まるで私が悪い事したのに謝らない人みたいじゃないですか！！」

B J「ではでは、そろそろお別れの時間がやってまいりました。ありがとうございます。またのお越しをお待ちしております」

三河「ありがとうございます！　後でお仕置きしてあげますから楽しみに待っていてくださいね」

何可愛く『ね』とか言ってるの？　キモッ　プフ

三河「逮捕したるワァー！！！」

B J「……さて、走り去った三河さんはほって置きましょう。では最後に皆さん一人一人から一言頂けますか？」

その言葉を受けて、最初に葉倉が話し始めた。

葉倉「何かトークっていうほど話してない気がするけど、それなりに楽しかったよ。それとバカ二人が騒がしくてゴメンね。人選間違ってたかな」

続いて安が口を開く。

安「俺は現在、彼女募集中だ。外見と性格が美しい女の子は、いつでも連絡してくれ、待ってるぜ。それとツインバカが迷惑かけて悪

かったな」

安の言葉が途切れると同時に、柳が立ち上がって話した。

柳「へっへっへ。そう簡単に一言貰えると思……おっと、慧、その振り上げた拳は収めたまえ。……まあアレだ、みんな健康に気をつけて楽しく頑張っ行ってこうぜ。あとバカソータとケイがうるさくて済まなかったな」

三人はお互いにバカ呼ばわりし合ったことで、睨み合っている。

安は立ち上がり、貴族の様な気取った、美しいお辞儀をした。

安「さうで、ここらで一旦お別れだ。おおっと、そんなに悲しまないで。またすぐに会えるから。再会は今夜、アナタの夢の中で……。グツナイ、キティ。次、ケイ」

次に、指名された葉倉が立ち上がり、全力で愛想笑いをしながら話し始める。

葉倉「そうきたか……。ええっと……君の笑顔は太陽よりも輝いているよ。だからどんな時も笑っていてね。その光はみんなに届くから……。それじゃ、チャオ。そんでもってトリ、カイ」

最後に柳が起立し、場を閉めにかかった。

柳「何だこのノリ！ あゝ、えゝ、今日のこの出会いによって、皆のポテンシャルが少しでもエクステン……。ムリ。さらばだB」、  
三河！」

柳は脱兎のごとくその場から逃げ去り、残り二人もその後を追った。

B J「いえいえ。私にも迷惑ばかりかけるバカが居て申し訳ありません。皆さんにもご迷惑をおかけしました」

三河「…… B Jさん。それはどういう意味なのでしょうかねエ？  
……あれ？ もしかして今のフリだったんですか!？」

B J「さあー？ どうなんでしょうね」

三河「……ウチのバカがすみませんでした」

両者睨み合う……という所まではなかったみたいだ。残念!!

B J「ありがとうございました！ また今度もよろしくお願いします!!--」

三河「またのご来店お待ちしております!」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2854j/>

---

時空越えトーク・物語

2010年10月10日06時56分発行